

相続について 日経で情報収集!

相続トラブルはお金持ちの話と思いませんか？
相続で一番もめるのは、遺産が1000~5000万円程度といわれています。
相続税が増税になるのをきっかけに、相続について考えてみませんか？

専門記者の解説記事や専門家の意見を参考に

遺言の作成助言から保管、執行までを専門ノウハウのある信託銀行などにまかせる「遺言信託」というサービスを利用する方が増えています。相続税の節税と相続トラブルを避けるという点が人気です。来年1月からの相続税増税ということもありますが、裁判所に持ち込まれる相続トラブルが増えていることも背景にあります。裁判所に持ち込まれる遺産分割案件のうち、1000万円以上5000万円未満が45%、1000万円以下が31%と、5000万円以下の案件が76%にのびります。

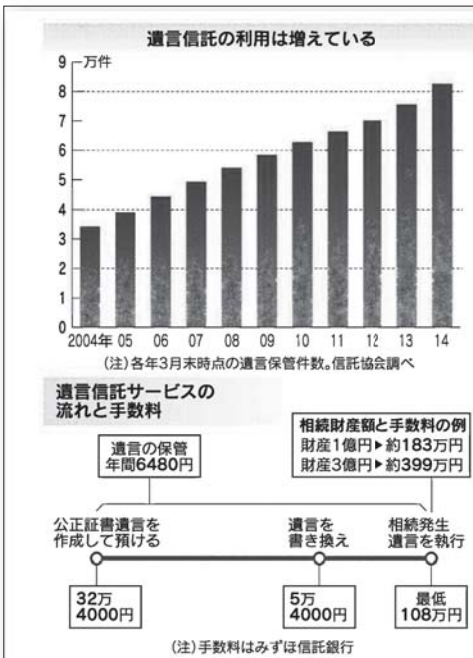
※平成23年司法統計「遺産分割事件で扱う財産額の内訳」

「M&I(マネー&インベスト)面」 水曜日、土曜日掲載

「あなたと家族のお金、はじめの一步」をコンセプトに、わかりやすい資産形成の情報をお届けしています。これから投資を始めようと考えている方、さらに金融知識を深めたい方に役立つ紙面です。抜き取って保存もできます。

水曜日は「マネー計画」。投資や節税、社会保障の最新トレンドを紹介。土曜日は「マネー道場」で、住宅の購入や退職金の運用など、お金の諸問題の解決策を家族の物語を通して紹介します。このほか、お役立ちコラムも満載です。

「遺言信託」プロにおまかせ



遺言の作成助言から保管、執行までを専門ノウハウのある信託銀行などにまかせる「遺言信託」というサービスが伸びている。相続税を節税しつつ相続トラブルも避けられる遺言をプロの助言で作成し、それを確実に執行したい人が増えている。料金はおおむね100万円を超えるが、契約者は富裕層だけではなく、財産が数千円規模の中流層も少なくないという。

遺言信託の契約者は相続に詳しい担当者とともに遺言を作成する。だれにどの財産を相続させるのか、自分の考えを遺族に伝える遺言はひとりでも書ける。ただ、相続人ごとに決まっている最低限の権利である「遺留分」を侵害してたり、相続税の負担が重かたりすると、後々もめ事になりかねない。

三菱UFJ信託銀行では「財務コンサルティング」という行内資格を持つ行員が対応する。土地や建物の登記簿、本、固定資産税の証明書、保険証券などをそろえ、財産の一覧表を作成。契約者の希望を聞いたうえで遺言の文案を示す。「生前贈与や資産売却の可能性、納税資金の準備なども検証する」シテール受

遺言では遺言信託サービスを提供する信託銀行に指定した「遺言執行者」に指定しておく。遺産の名義変更や換金処分などを遺言執行者の

遺言の作成、保管、書き換え、執行はそれぞれかかる。中でも大きいのは執行の手数料で、必ず信託銀行の場合、手数料は相続財産1億円以下で1~836万円、同行のほか、みずほ銀行、みずほ証券で預かっている金融商品は別途、割引料率が適用されるが、手数料は最低でも108万円かかる。地方銀行や信用金庫など地域金融機関も、主に代理店として遺言信託を扱っている。横濱銀行は、信託執行のほか信託会社の朝日信託、山田エスクロー信託の代理店をしている。同行によると、「契約者の財産額は平均で5000万~7000万円ほど。手数料が安い信託会社を選ぶ人も多い」(資産家取引推進・支援グループ)。このほか一部の弁護士事務所も遺言信託サービスを手がけている。(表格志)

執行まで安心、料金100万円超

権限を進め、相続人全面倒な手続きから解放するため、ただし相続人との間に争いがある場合、信託銀行は執行者にならない。子どもの認知など身分に関する執行もできない。あくまで円満な相続を前提としたサービスだと心得ておきたい。

費用は遺言の作成、保管、書き換え、執行はそれぞれかかる。中でも大きいのは執行の手数料で、必ず信託銀行の場合、手数料は相続財産1億円以下で1~836万円、同行のほか、みずほ銀行、みずほ証券で預かっている金融商品は別途、割引料率が適用されるが、手数料は最低でも108万円かかる。地方銀行や信用金庫など地域金融機関も、主に代理店として遺言信託を扱っている。横濱銀行は、信託執行のほか信託会社の朝日信託、山田エスクロー信託の代理店をしている。同行によると、「契約者の財産額は平均で5000万~7000万円ほど。手数料が安い信託会社を選ぶ人も多い」(資産家取引推進・支援グループ)。このほか一部の弁護士事務所も遺言信託サービスを手がけている。(表格志)

2014年10月25日(土)日本経済新聞朝刊 M&I面「Saturdayマネー道場」

日経の読み方 紙上講座

第8回 セレンディピティでビジネスに勝つ!

前回の講座では、新聞の「面建て」が「一覧性」に貢献し、「セレンディピティ」を発揮できるとお伝えしました。今回は、「セレンディピティ」について考えてみましょう。

ビジネスの視点でニュースを読む

セレンディピティ(serendipity)とは何だったでしょうか。「思わぬものを発見する能力」と一般的には訳されます。新聞を読む上でのセレンディピティは「この記事が重要だと発見し、幸運を掴む能力」のことです。でも、日経の朝夕刊には300本もの記事があります。数多くの記事の中から「思わぬ重要な記事」を見つげるためにはどうすればいいのでしょうか。答えは「ビジネスの視点」を持つことです。つまり、「経済や企業に与える影響」を考えながら新聞を読んでみると、「思わぬ重要な記事」を見つけやすくなります。

このニュースは自分に役立つ?

このニュースで「チャンスになる業界(企業)は?」「リスクになる業界(企業)は?」とか、「川上、川下の業界にはどんな影響が?」とか、「ライバル会社の動きは?」と考えてみてください。第4回の講座「経済ドラマの『タテ』と『ヨコ』」でお伝えしたように、経済ニュースは思わぬ「ヨコ」の展開をすることがあります。日頃から経済の視点でニュースを眺めていけば、思わぬ動きもやがて予測できるようになります。

また、新聞記事には「事実」「背景」「今後」があるとお伝えしました。なぜそれが起こったのかという「背景」を、他の企業や業界にもあてはめて考えてみましょう。例え

ば、ある企業が「少子高齢化」に対応するために新商品を開発したというニュースがあります。それは自分にとっては関係のない企業や業界のことで、使う必要もない商品です。しかし、「少子高齢化」はその企業だけの課題ではありません。自分の属する企業や業界にも関係する問題です。このニュースは新規事業や新商品開発のヒントになるニュースなのかもしれないのです。

ビジネスの視点を持ってニュースを読んでいると、「これは自分に役立つのかな」とか「自分の勤める会社に役立つのかな」という視点を自然と持つようになります。さあ、セレンディピティを意識して新聞を読んでみましょう。きっとあなたのビジネスに役立つ記事が見つかります。

続きは次号で!